新渡戸稲造記念センターニュースレター 第 11 号（2021.10.01）秋号

「カフェは心でする対話の場」　がん哲学外来東中野メディカル・カフェ　奥山 寧

ここはグループホームを中心とする高齢者施設。1 階には地域に開いた交流スペース、キングスカフェ。誰でもふらっと訪れることができ、また、多目的スペースで好きなことを好きなお仲間とすることができます。施設の OPEN は 2015 年 3 月、その年の 5 月にがんカフェ開設。個人的なことでしたが、私の友人がかなり進行したがんと告げられ、私自身がどう接したらよいか苦慮していたこともきっかけとなりました。交流スペースはもともと、誰かのためにケアをしている潰れてはいけない方々の居場所となれれば、という思いで立ち上げましたが、当然ケアされる当事者のためのものでもあります。ここに地域のさまざまな"たいへん"を背負っておられる方々がそれぞれの事情を持ち寄り、そうであっても"ありのまま"でいられるところを目指しました。

コロナ禍で休止した期間もありましたが、「こういう時だけれども、こういう時だからこそ……」と再開を望む声に後押しされて、会場少人数、広角カメラと収音マイク、プロジェクターで大写ししながらオンライン参加併用で開催しています。カフェでは、初めて来られた方が口を開こうとする時、周りの方々の心が身を乗り出すのを感じます。その方の想いに真摯に聴こうとする心遣いです。そして、その想いを心の内にする時、さまざまな気づきが与えられ、参加された皆さんの想いが、さらに暖かくそのテーブルを覆っていきます。誰しも、今ある自分を“ありのまま”に受け止めることは難しいものです。どうしても辛口に評価してしまったり。けれども、そんな自分の想いを受け止めてくれる方が傍らにいてくれて、自分自身の存在の証人にもなってくださる、そんな場はそうはないかもしれません。今とても必要とされている空間ではないでしょうか。

「がん哲学外来鳩ケ谷メディカルカフェ」の設立　鳩ケ谷メディカル・カフェ　峰岸 大介

「何でこんなに前向きなのだろう？」

2015 年に秋田県にある玉川温泉で出会ったがん患者の方々の印象でした。そこで初めてお会いした方との会話が「お兄ちゃんはどこのがんなの？」「俺は〇〇がん。化学療法やめたらすぐに髪の毛生えてくるから大丈夫」でした。その後も挨拶のように同じ会話が繰り返され、治療経過を勲章のように生き生きと語るのです。

そこに病人はいませんでした。「この辺りは熊が出ると聞いたけど、怖くないのですか」と聞くと、「がんと熊とどちらが怖いんだよ」と笑いながら言い返されました。がんに対して普通に会話できる環境に心が解きほぐされていくのを感じました。

2013 年 4 月に「胸腺がん」という希少がんに罹患している事がわかった時には、すでに「ステージ４」でした。5 月に手術して胸腺と右肺は全摘となりました。その後再発、転移があり腫瘍の成長の早さに、がんの恐ろしさを認識しました。そして放射線治療、化学療法を行い、現在治験を行っています。

ある時、妻ががん哲学外来をみつけ 2018 年 5 月の樋野先生の出版記念講演会で活動内容を知りました。12 月に初めてがん哲学外来＠川越のぞみカフェに参加し、玉川温泉での体験と同じような安心感が与えられたことを覚えています。そして、自分もがん哲学外来で何かお手伝いができないかと考え、鳩ケ谷福音自由教会の大嶋牧師に相談しました。大嶋牧師や教会員の方々は自分のがん発症からいつも励ましてくれていました。そして教会から場所提供の快諾を頂き、有志とともに「がん哲学外来鳩ケ谷メディカルカフェ」を開設することになりました。コロナ禍で 1 年延期しましたが、2021 年 6 月から隔月でスタートしています。がんで苦しんでいる患者の方やご家族、ご友人がほっとできる、安心できる場を作っていきたいと思います。そして将来的には近隣の病院と連携していければと考えています。